

末永敏事平和記念館 開館5周年記念

末永敏事資料集



明治20年（1887年）～昭和20年（1945年）

1912年、長崎医専の大正元年卒業アルバムに掲載された末永敏事
(長崎大学附属図書館医学分館提供)

一目次一

末永敏事の親族と友人井村兼治氏	1
医療関係者職業能力申告令の条文（1938年、昭和13年勅令）	2
特高月報 昭和13年10月分（逮捕当時の所属、職業、年齢及び逮捕に至る言動）	3
敏事の博士号取得を知らせる大島原新聞（昭和2年2月1日付） 見出し	4
敏事の博士号取得を知らせる大島原新聞（昭和2年2月1日付） 本文	5
内村鑑三の戦争廃止論が掲載された萬朝報（1903年、明治36年6月30日付）	6
内村鑑三より敏事へ宛てた1916年（大正5年）7月15日付書簡	6
末永敏事と同時期に活動した人々（内村門下） 矢内原、藤沢、浅見の各氏	7
米国留学中に発表された敏事の論文 1920年代（大正年間）	8
米国シンシナティにて撮影された末永敏事	8
米国シンシナティにて撮影された末永敏事	9
末永敏事の医学論文一覧	10
内村鑑三より敏事へ宛てた書簡	11
末永敏事より教友蒲池 信氏へ宛てた手紙	12
末永敏事がフレンド派「友」第104号へ寄稿した詩「山吹の花」	13
末永敏事が燐家へ贈った書籍にあった謎の一文	14
末永敏事が同郷の学友？へ送ったはがき（明治42年（1909年）1月21日付）	15
末永医院の登記に関する記録	16
静江夫人縁の自由学園 THE GAKUEN WEEKLYに掲載されたDr. Suenaga の英文原稿	17
静江夫人の活躍を伝える雑誌記事	18
静江夫人の活躍を伝える雑誌記事と当時の自由学園明日館	19
末永道伯・敏事親子の遺品等	20
付録 北有馬村今福周辺図	21
末永敏事の略歴と内外の動き （年表）	22

1934年（昭和9年）1月1日付学園新聞



中島静江 1900年（明治33年）～1989年（平成元年）

範子 1929年（昭和4年）～2011年（平成23年）

敏事の元夫人中島静江のフランス留学を伝える学園新聞

へ掲載された母娘写真。範子ちゃんとは敏事の娘さん



末永敏事と妻の静江（親族提供）

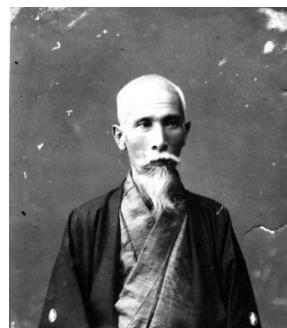
1927年（昭和2年）結婚、昭和8年離婚



敏事の友人井村兼治翁（前列右）と正治氏一家



敏事の母 チヨ



敏事の父

2代目 末永道伯

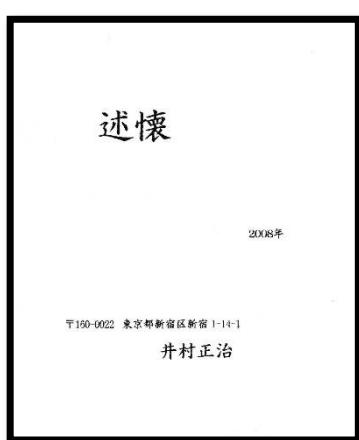


敏事の元夫人、静江さんの父
中嶋滋太郎

（元日本郵船専務取締役、
元日本海事海事協会理事）



1940年代の壮年期の兼治氏



述懐

敏事の友人井村兼治氏のご子息正治氏による

敏事と井村家に関する貴重な記録

内容については、記念館にて展示中

（井村兼治氏に関する資料は井村修治氏提供）

医療関係者職業能力申告令の条文（1938年、昭和13年勅令）

第3493号

本文

第3493号

本文

特高月報 昭和十三年十月分 今般の資料

宗教運動の状況

従するも基督教界に最も現る行爲者を多く見つゝある所なるが、本月中も其の主要なる要注意言(行)動別記の通りにして右の外固陋なる同教育信者中には、強いて我が國體を基督教に結合せしめんと試み、徒らに我國史古典を絶縁するが如き妄説を唱ふる者等あるを以て、此の種行動に對しては引續き注意取締の要あり。

基督教教師、信者の要注意言(行)動

縣府	言 動 者	言 動 者	言 動 者	言 動 者	措 置
兵庫	日本メソヂスト教 會 信者	白十字會保養農園 在大阪市 某人宗教師 末永敏事	長野 在大坂市 某人宗教師 末永敏事	茨城 白十字會保養農園 在茨城 某人宗教師 末永敏事	

今世間では「國民精神統制員」「凌私親國」などと云つて大變亂制してゐるが果してその如きによって何ものが得られるか疑はしい。……大阪の小學校にて先生が未だ純良な児童に對して、「あんなの信仰して居るキリスト」と日本の天皇陛下と敵手をなす時どちらに味方するかと云ふ質問を發したといふことである。實に認識不足も甚だしい。……今吾々の周囲の人は「日本精神」「大和魂」など云つて居るが果してそれか本當の正義であり愛であるか?吾々の供奉する基督教はこそ絕對的正義であり本當のものである。されば宗教職業者職業能力の口舌に關し基督教知事に對し次の如き通告を爲せり。
「諸君職業能効の宣傳の機會として入所の跡除兵及兵士家族に於ける自身の立場を明白に致すべきを感じ玆に付記する旨通告申上げます。」

〔在東京大谷教團に創し大の如き道徳を傳せり。時の新編主張と示さんと開えて居る日本の基督教徒の兵士並に將校に其の地位を利用して凡少の機会に宣教師と協力して支那人と共に基督教の傳播に參列して支那婦人を保護することを建議する。若し個人の日本人の基督教徒が彼に手を伸ばすことがあらざれば偉大なものである。〕

本月中に於ける宗教犯罪の檢舉及其の他宗教々師等の宗教乃至信仰を利用する不正行爲の取締狀況概ね次の如し。
宗教事犯檢舉概表(十月中著報せるもの)

二、宗教犯罪其の他不正行爲の取締狀況

特高月報

昭和十三年十月分

内務省警保局保安課

茨城県鹿島郡に造られた白十字会恩賜保養農園の全景
(白十字会100年史から) 末永敏事は1938年



敏事と同時期に活動した人達



やまいちはら ただお
矢内原 忠雄

明治26年（1893）～昭和36年（1961）

NPO法人今井館教友会提供

戦後に東大総長



藤沢武義

明治37年（1904）～昭和61年（1986）

NPO法人今井館教友会提供

無教会主義の伝道師



浅見仙作

NPO法人今井館教友会提供

北海道にて農民伝道に携わる

詳細については森永玲氏著『反戦主義者なる事通告申し上げます』を参照ください

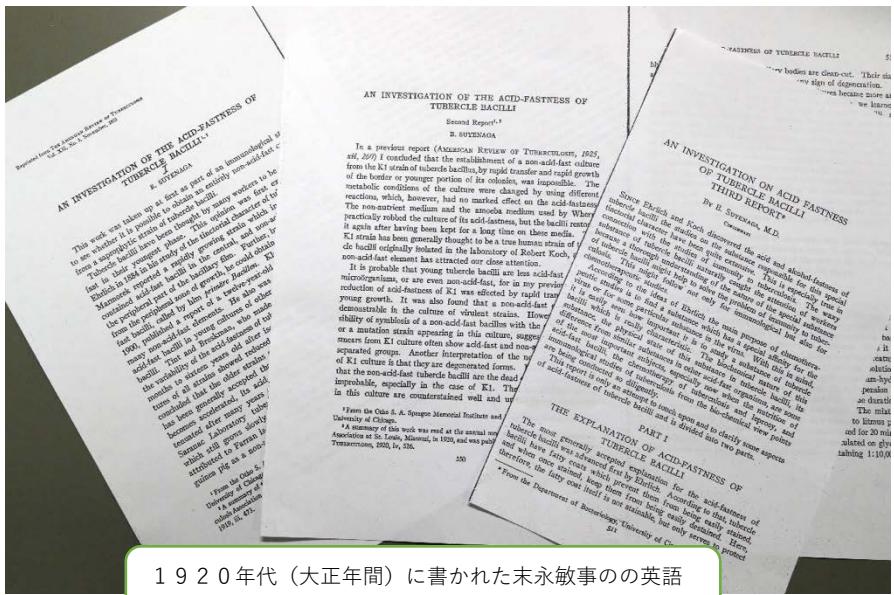


角筈聖書研究会々員 明治36年3月 内村家の前にて

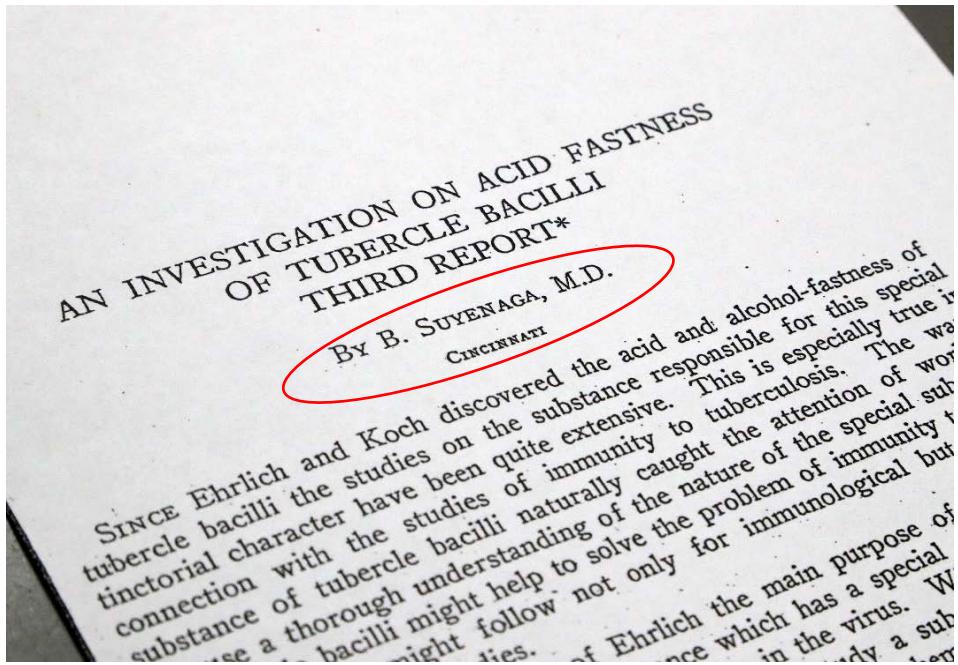
(前列) 左から4人目、黒木耕一、8人目鈴木与平(沢野通太郎)、(前列)右から、葛巻行孝、一人おいて森本慶三、一人おいて浅野猪三郎、(後列)左から、若林鑑太郎、山岸光宣、山岸壬五、小出満二、大賀一郎、志賀直哉、中央、内村鑑三、同夫人しづ、3人おいて蒲池春江、石橋智信、(後列)右から、永井久録、倉橋惣三、小山内薰、一人おいて田中龍夫。

敏事の手紙にある「蒲池 信、御内」と関連は今のところ不明

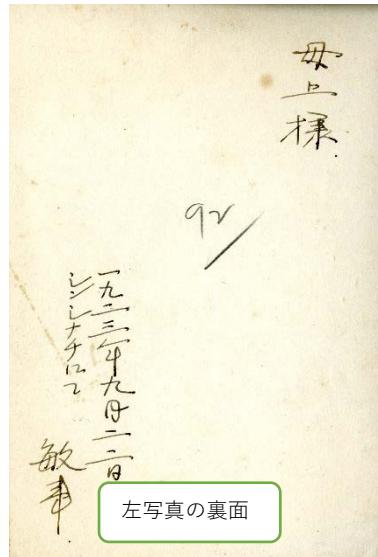
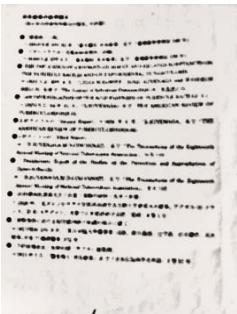
NPO法人今井館教友会提供



1920年代（大正年間）に書かれた末永敏事の英語



1923年（大正12年）米国シンシナティにて
(七條眞由美さん提供)



左写真の裏面



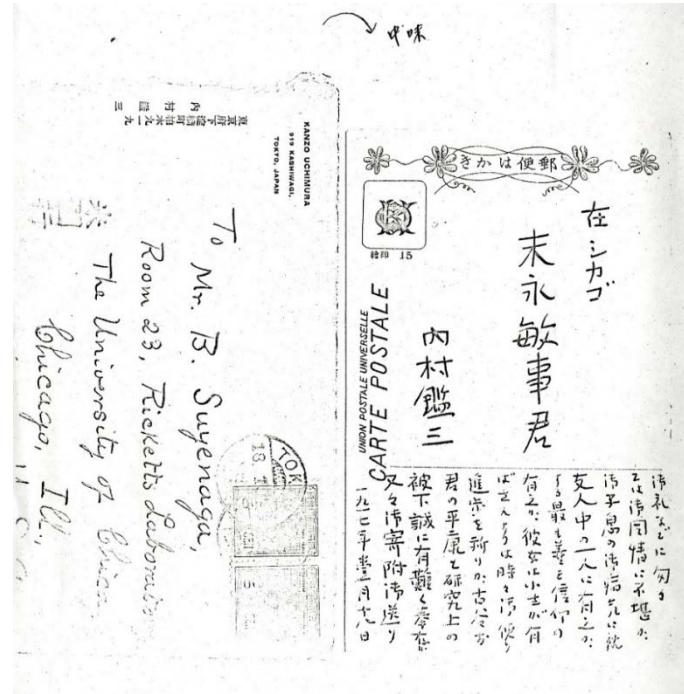
1924年（大正13年）9月24日 米国シンシナティ（七條眞由美さん提供）
左の人物は不明



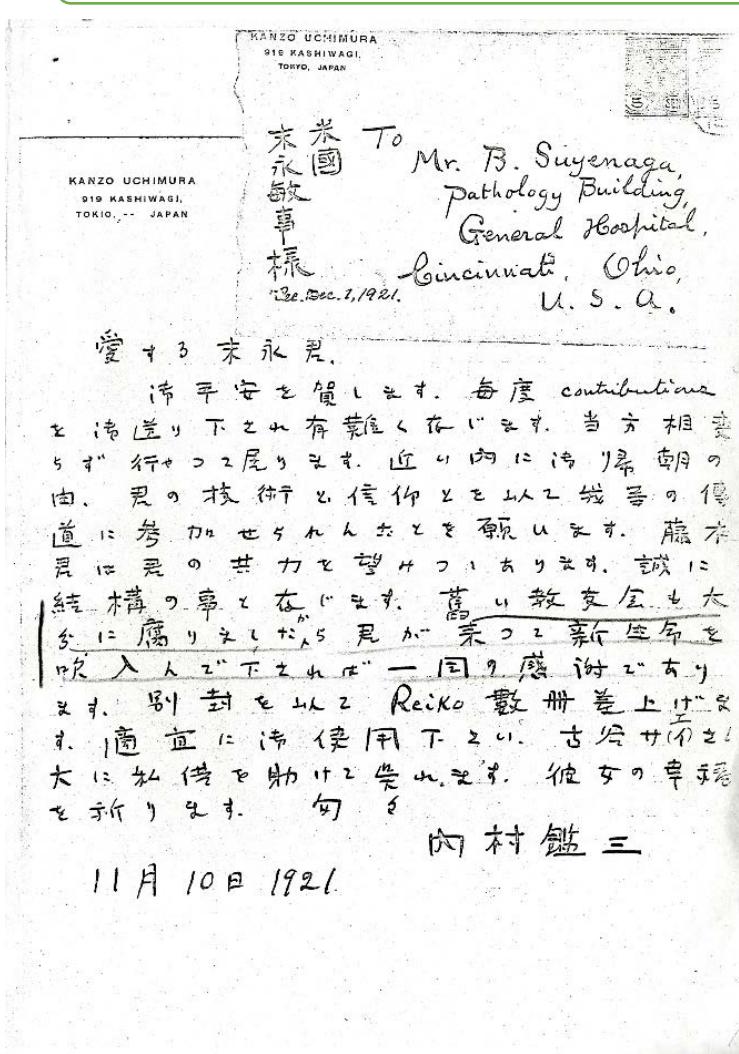
上記写真の裏面

(国立国会図書館所蔵分の複写、年代順)

- 「萎黄病ノ二例」
=1914 (大正3年) 12月、「台北医院 末永敏事」名で「台湾医学会雑誌146号」
- 「ビオルコウスキーキー氏亀結核菌製剤ノ治験」
=1916 (大正5年) 12月、「台北医院 末永敏事」名で「台湾医学会雑誌159号」
- 「THE INFLUENCE OF CREOSOTE, GUALACOL AND RELATED SUBSTANCES ON THE TUBERCLE BACILLI AND ON EXPERIMENTAL TUBERCULOSIS」
=1920 (大正9年) 8月、「LYDIA M. DeWITT BINZI SUENAGA and H. GIDEON WELLS」共著で「The Journal of Infectious Diseases1920.08」
※表紙のみ
- 「AN INVESTIGATION OF THE ACID-FASTNESS OF TUBERCLE BACILLI・I」
=1925 (大正14年) 11月、「BINZI SUENAGA」名で「THE AMERICAN REVIEW OF TUBERCULOSIS1925.11」
- 上記タイトルの「Second Report」=1926年6月、「B. SUENAGA」の名で「THE AMERICAN REVIEW OF TUBERCULOSIS1926.06」
- 上記タイトルの「Third Report」
=「B. SUENAGA, M. D. CINCINNATI」の名で「The Transactions of the Eighteenth Annual Meeting of National Tuberculosis Association」、年月不明
- 「Preliminary Report of the Studies on the Parasitism and Saprophytism of TuberclBacilli」
=「B. SUENAGA, M. D. CINCINNATI」の名で「The Transactions of the Eighteenth Annual Meeting of National Tuberculosis Association」、年月不明
- 「坑道*病性要素欠乏ノ白鼠ノ実験的結核ニ及ボス影響」
=1926年、「北米シンシナティ大学医科細菌学及生物化学教室末永敏事、アグネス・H・グラント、D・Eステグマン」
共著で日本結核病学会誌「結核」4巻1号
- 「脊髄後根に於ける副交感神経の組織的検出に就いて」
=1927 (昭和2) 年9月、「東京帝国大学医学部 吳建、新田義雄、辻守昌、白石謙作、末永敏事」共著で
「芸備医事」372号
- 「予防接種直後ノ家族的腸「チフス」感染例」
=1927年7月、「医学博士 末永敏事」名で「日本伝染病学会雑誌」1巻10号



1917年（大正6年）1月18日付 内村鑑三から米国シカゴの敏事への



1921年11月10日付 内村鑑三からシンシナティに移った敏事への書簡

「君の技術と信仰と以って我等の伝道に参加せられんことを願います。」と期待をのべている。

拜啓

今回左記友人の郷里で開業

内科一般の診療に從事する事となりましたから此段御通知

申上ます。

小生關係に於ては今日まで喪を發しなかつたといふ様な状態となつて居ましたが最も恩愛深かりし友人にして骨肉なりし叔母(古谷春)と妹(市川霞)とを昨年夏秋の頃に失ひ双腕を殺されし思ひで暮して來ました事を併せて御報申上ます不自由と困難との中に在りて我等の國籍は天に在りの精神を目標として茲まで進んで來ました事を深く感謝して居ます。御一同の上に祝福の彌増さん事を祈つて居ります。向後も一層の御誘導を御願ひ致します。

昭和十二年四月十五日

茨城縣久慈郡賀美村折橋

末永敏事

蒲池

御信
様

昭和十二年四月十五日

茨城縣久慈郡賀美村折橋
末永内科醫院

昭和十二年

蒲池大兄

敏事

1937年(昭和12年)7月11日付の蒲池 信宛の

同様の御友愛をも深く感謝して居ります。
奥様初め曾孫(孫)、娘、孫女、曾孫の健勝を日々新しく居ります。國親とお母とのゆきも神の聖母と見て、彼は尚ほ最後の主仰と希望とを有す。幸ひ此は深く感謝して居ります。

蒲池大兄
幸ひ先君とは申一までも、何事もはあら
高地の御苦労太田の集落へゆきます。
人口三千、福島特焼も三里位の高さで土
地も因多と東北半島の山風を帶びて居ります。
追回

東京市杉並区天沼三丁目六〇五番地

蒲池 信
御
様

山吹の花

末承敏事

低けれど、小さけれど、
少く人に見らるれど、

汝は疲れし眼、痛める心に
大なる慰藉と深き想とを送る

日本の春の山吹の花

心の花の山吹の花

嫩葉は先に新春の
希望に満ちて噴き出でぬ。

昔ながらの山吹の花

自然の美！

その有する靜謐！

然して今、汝に顯はるゝ
自然の美！

かの澎湃たる唯物主義のため
に、かの虚榮と偽りの美のために
現代の不安と焦躁とを安定す
るの要素は汝にあるにあらず
るか！

勝たざれば、獲ざれば已まぬ
現代精神

かの澎湃たる唯物主義のため
に、かの虚榮と偽りの美のために
現代の不安と焦躁とを安定す
るの要素は汝にあるにあらず
るか！

堪忍は無事長久の基
怨は敵と思へ
勝つをのみ知り負くるを知
らぬ
身に害來ると教へたる
古人の歩みに劣るかな！

斯くより深き所にて
汝に大なる世界あり、
日本のかの花の山吹の花

かの文明の狂奔を制する手綱
現代の不安と焦躁とを安定す
るの要素は汝にあるにあらず
るか！

勝たざれば、獲ざれば已まぬ
現代精神

堪忍は無事長久の基
怨は敵と思へ
勝つをのみ知り負くるを知
らぬ
身に害來ると教へたる
古人の歩みに劣るかな！

べきものなるを」とまで極言
してゐる。

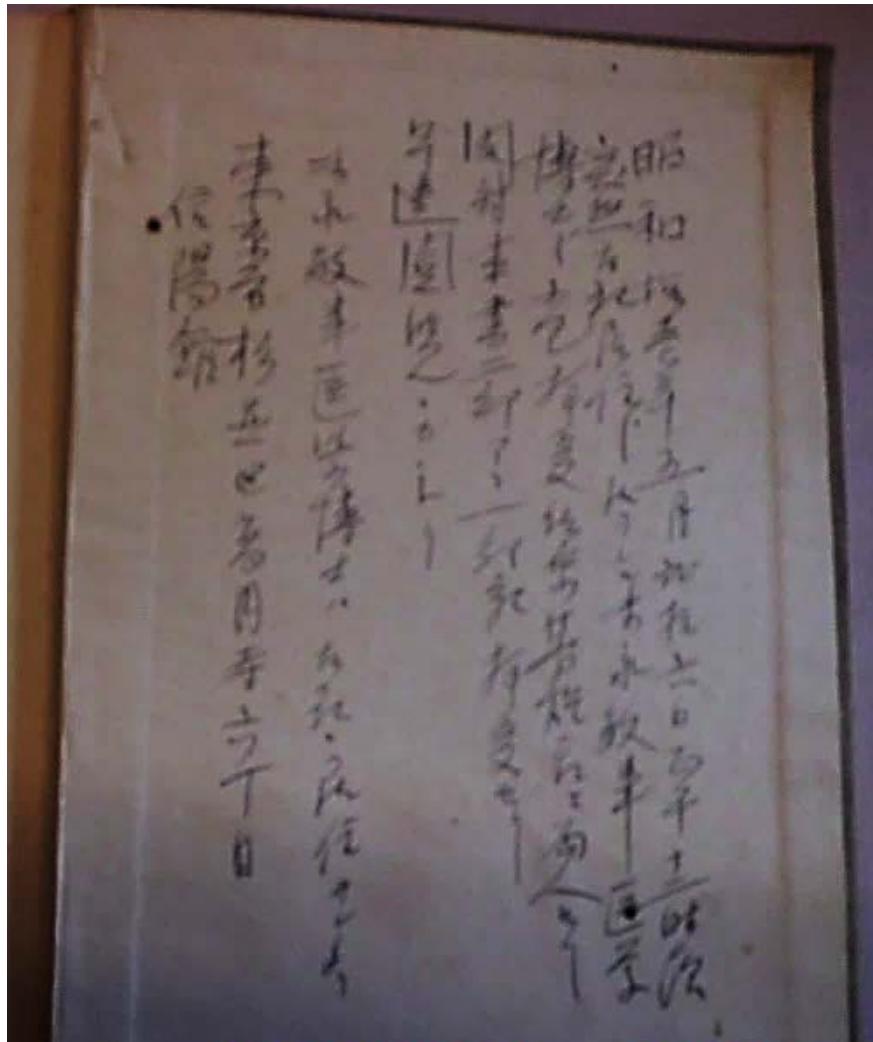
由れるものにあらず、我は人
より之を受けず、また教へられ
ず、唯イエス・キリストの
默示に由れるなり」と断言し
た「人より非ず、人に由る
にも非ず、イエス・キリスト
父なる神に由りて使徒となれ
るバウロ」これ實に彼の抜く
べからざる信念の根柢であつ
た。彼はこの信念に立つて憚
らず「凡ての使徒よりも我は
多く働き」とまで宣言した
彼は彼の神秘的経験と、キリ
ストとの靈的融合に於て「最
早、我生くるにあらず、キリ
スト・我にありて生くる」と
確信した。我我にあらず、キ
リスト我に、故に我語るは我
語るにあらず、内なるキリス
トにありて語る。かくて彼
は賤しき我に内なる神を見、
内なる神の聲を聞いたのであ
る。この境地に達した彼に何
日何時、どこでイエスがかく
云つたとか云はなかつたとか
は問題ではなかつた。イエス
は畢竟ではなかつた。イエス
の本義を未だ悟らぬ輩である。
宗教は或る特定の思想體系と
のみ心得る輩に外ならない。
(未完)

由れるものにあらず、我は人
より之を受けず、また教へられ
ず、唯イエス・キリストの
默示に由れるなり」と断言し
た「人より非ず、人に由る
にも非ず、イエス・キリスト
父なる神に由りて使徒となれ
るバウロ」これ實に彼の抜く
べからざる信念の根柢であつ
た。彼はこの信念に立つて憚
らず「凡ての使徒よりも我は
多く働き」とまで宣言した
彼は彼の神秘的経験と、キリ
ストとの靈的融合に於て「最
早、我生くるにあらず、キリ
スト・我にありて生くる」と
確信した。我我にあらず、キ
リスト我に、故に我語るは我
語るにあらず、内なるキリス
トにありて語る。かくて彼
は賤しき我に内なる神を見、
内なる神の聲を聞いたのであ
る。この境地に達した彼に何
日何時、どこでイエスがかく
云つたとか云はなかつたとか
は問題ではなかつた。イエス
は畢竟ではなかつた。イエス
の本義を未だ悟らぬ輩である。
宗教は或る特定の思想體系と
のみ心得る輩に外ならない。
(未完)

午後二時頃、坂路を登り跡
あた臺地に展開された秘境。桃
園の里とは名なし音ふへき
か。最初右手なる農園を訪へば
は確乎として再び力強く喚び
活されたのである。

この熱烈な確信はやがて初
代キリスト教を覆ふの觀をさ
へ現じ出し、終に人々はバウ
ロ流、たゞバウロの信仰、言
説を通して信仰を考へ、バウ
ロを通じてイエスを考へると
いふやうなことにさへなつた
またしてもバウロが教權にま
たの懐しさを覺えしめられる。之
は自分が訪ね先を詳にしなかつ
た爲で、直ぐ疑問は解けた。真
剣なる同胞の爲に、少年、感化院
を此の秘境御船村に建て、彼を
より暖き愛の父と仰がる。主人
無崎氏は、嘗て牧人として過さ
れし善良なる基督者。數名の青
少年が、果樹園や、モモキット
等の畜産に懸命に労作して居
るのを見させてくれた。

據て、左手の西宮道元氏の
經營する力ナン園、新しき村
を見學する。之は前者より規模
は大きく、六町位ある由。桃梅
の外に葡萄、苺、竹の仔、栗、
柿等の果樹、兎、雞、家鴨、蜜蜂
等の畜産。悉く理理想的
に行はれて居り、我らの求むる
自給自足が如實に、目のあたり
實施されて居るのである。而かも
此の園が全くキリストの宗教
的氛圍に包まれ、十数名の傳
人があり、A氏の家族と一同となつ
て「金し替し平和な生を營んで



(井村泰成氏提供)

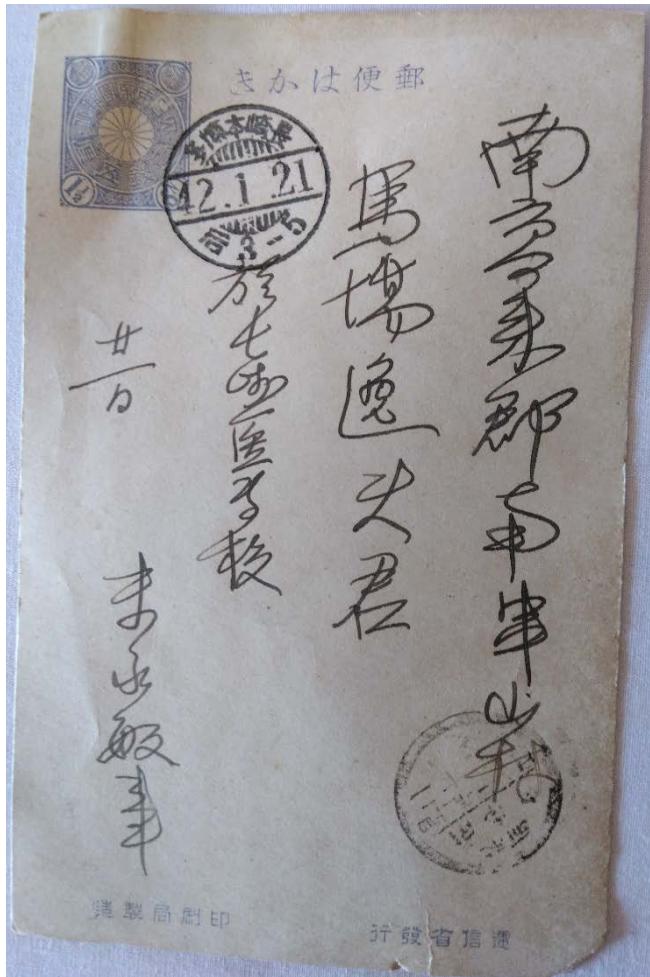
末永敏事医院隣家 井村家ご子息 壽彦氏へ敏事より贈られた書籍の表紙裏側へ記された一文

上記枠内の如く読み取れるも、詳細については不明、更なる解読作業が必要です。誰が何のために記したかも不明で、末永敏事名の後に医学博士であること、及びその筆跡より敏事本人ではないと考えられる。

東京の住所の読み方は、ほぼ間違いないと思われますが、ほかの箇所については定かではありません。教友蒲池 信氏の住所も東京市杉並区であることから関連がある可能性があるのかもしれません。

何方が解読なされた方があればご一報いただけますと幸いです。

新たな発見に繋がる可能性があります。



未だに法事の事を病氣の重うせ経を如山全快と
段にあり申さるや法事りのアリと岸寧吉試験の事
表裏を示す事も承れ。先寺(第四)を廿六日(年正月七日)解説。
花見メ→仲良。二月一日華化子及有化子(一)
音組識字(牛前九叶)是也。唯今者え五つするを慮
御務深多事ノ内念せたれ一に病氣の差め要駿ち事ある
以て折衝書を添えて三月七日届かフヘイ此する件を二
月十日店(中)追試験を受ケラミ_(之の外加算く三種付)との事。12
在。陸事ナラニテ是後法事の事也。及翌朝に旅を便乗成
蹊正得。又車を走れ。不辛も見えられざらんもその如一とが、あ
りと先方お手筋たてて獲得し里く方ち一はれど、其の出事ニシテも、あ
はれでござる。又人間の事も、あはれでござる。

未だに御出崎なきは病氣の重らせ給わぬ迄も、全快といふ段になり申さぬにや御困りの事と奉察候。試験時間表愈々発布せられ候。兄等（第二組）を廿六日（午前九時より）解剖。廿九日（マーマー）独逸。二月一日無キ化学及び有キ化学（マーマー）五日組織学（午前九時より）にて候。唯今貴兄、万一の事を慮り教務課に来たり問い合わせ給ひしに、病氣のため受験出来ざる時は診断書を添えてその旨届出づべし。然する中は二月十日迄の中追試験時間表により追試験を受けらるべし。その他一切受くる能はずとの事にて候。ご参考のため以上御報致置候。後時学期に於いて優等の成績を得られなば、落第の不幸を見られざらんも。それにも少くなりとも前学期において獲得し置く方よろしければ、出来ることならば御出崎なさるべく候。されどもされども必ず、無理をなして後日将来の悔いとなし給はざらんことを。

明治42年1月21日（1909年）付 敏事のはがき

敏事が長崎医專在学中に出したものと思われる。
はがきの消印を最寄りの郵便局にて調べるも
該当する局は現在存在しないとの事であった。

蒲池 信 氏宛の直筆書簡の筆跡と同じで
正に敏事のもの。
左は、それを清書したもの。

末永医院の登記に関する書類

敏事の名前が読み取れる

(示表の物種別欄) 部 題 表				(示表の物種別欄) 部 題 表			
家屋番号	所 在	登記の日付	登記の日付	登記の日付	登記の日付	登記の日付	登記の日付
13 上屋 井戸 平瓦木 家 建 造	ス 診 察 室 倉 庫	ス 倉 庫	符 号	①種類	居 宅	①種類	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 所在箇番号
平瓦木 家 建 造	平瓦木 家 建 造	平瓦木 家 建 造	②構 造	平瓦木 家 建 造	六 六 卷 巷	②構 造	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 所在箇番号
九 九 巷	四 六 武 八	四 六 式 七	面 積 m ²	原因及びその日付	昭和六年法務省令第三十 七号附則第二条第二項の規 定により移記 平成九年九月一〇日閉鎖	原因及びその日付	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 所在箇番号
			登 記 の 日 付	一 丁		登 記 の 日 付	品和甲戌年四月卷日空 平成五年四月式〇日登記

井戸 上屋

診察室

THE GAKUEN WEEKLY

Published Every Monday for Private Circulation.

Edited by the Students of the English Section, First Year Higher Course.

No. 14.

Monday, 21st March, 1927.

OUR EXAMINATION

Nowadays we hear the girls saying "examination" here and there in our school. It seems as if they do not understand the true meaning of examinations in our school. The truth is that they are held to examine character, through the studies, and so the students need not face them with much fear. We notice the fear of examinations especially in the 1st year girls of Honkwa. We suppose they have not as yet left the atmosphere of their old private schools where students are examined only in studies.

The other day after the morning service the chairman of our committee made a speech for the 1st year girls. Then Mr. Hani asked one girl what he had told them about our examination the day before. It was as follows: "Our school does not estimate one's scholarship by examination only. Our daily lessons are daily examinations. The examinations are held to find out how much ability did the students get during a certain time. So when students take the examinations they should keep up a fearless attitude and try to show their abilities to the best advantage."

We wish all the girls in our school will gladly attend the examinations after knowing their real meaning.—M. S.

HYGIENE OF THE EYE

We heartily thank Dr. Suenaga for enriching the contents of our Weekly by the following valuable contribution.

We saw recently a Kodak picture of the captain and his two associates of a round-the-world cruiser in the Japan Advertiser. These three persons posed as the three monkeys of the Nikko carving, the 'Mi-zaru', 'Kika-zaru', and the 'Iwa-zaru', each symbolizing the sense of 'Not to see evil', 'Not to hear evil', and 'Not to say evil'. The art and its representation must have appealed very well to them. We, at the land of the said workmanship, must be careful not to forget them. Especially, many of us are in danger of abusing our eyes these days.

The so-called Western civilization is flooding into this meagre, although honourable, land of our birth in sweeping force. Our power of reaction and reproduction are not yet strong enough. The balance is always overwhelmingly for the import. Many sparkling and colourful things are being imported. They are 'delight to the eyes' and they seem 'to make one wise'. Irritated by the changeful tides of the time, our eyes become unstable and curious, enough to get ourselves often thoughtlessly into their companionship.

Few weeks ago, a part of the first year pupils of this school were examined on their health. It was surprising that the most of them showed some weakness or defect in their sight. Our work of the health examination has not progressed so much that we can give the results in a statistical way, but it seems to promise to give an unfavorable report so far as the sight is concerned.

The cause for the abnormality of sight is partly due to heredity or disposition, but it will be rather safe to say it more due to the careless use of the eyes. Such brilliant

colour as red and yellow, and such sparkling light as displayed in the photo-play, usually appearing in modern drama and moving picture are not really pleasing to the true nature of our eyes.

We all must learn better and more to read books and magazines. The good and great books are our best treasure. Yet we should abstain from the cheap magazines and questionable books which appear at the book-store and newspaper advertisement as 'mushrooms after a rain'. Turn our eyes often to the unfathomed azure sky and far horizon on the deep blue ocean. Green and blue colour are the restful to eyes. Let us not read in the darker part of the afternoon, especially such closely printed matter on paper of poor quality as newspaper which very often is made not to be well read but simply to be sold! We must read in as steady, mild and enough light as possible, always with distance of about one feet and two inches between our eyes and the book. Keep also your body straight then.

Thus let us try to hold our own and be discriminative in going to the attractive things. Then we shall be able to keep our eyes which are the light of our bodies so clear that we can see the Highest and many good things on the earth without the aid of such troublesome and often monstrous things as eye glasses.

WHAT WE DID FOR QUAKE SUFFERS

As soon as the tragic news of the earthquake in Kwansai District was reported, we did the following two things.

I. We sent 50 yen through the Asahi to the poor people who are suffering from the damage of the earthquake. This money was made by us by saving our board at school for three days.

II. We sent telegrams of inquiry to some families who are related to our school and live near the seismic centre. To our great joy, we received replies announcing that all of them were safe.—H. K.

THE ESTIMATE

It is good for ourselves or family or school that we make an estimate for the year. In our school, the second year of the higher course are now drawing up estimates for our school as their graduation work. They ceased their lessons from the 7th inst. and are occupied with their graduation work every day.

It is very difficult, because this work is the first work of the kind ever undertaken in our Gakuen and disbursements made during last year are not accurately recorded. But they are doing their work with all their might, dealing with separately Athletic Section, Music Section, Art Section, Adjustment Section, Library Section, etc.

When this is done it is hoped that there will occur no shortage in our school expenditure and our life will become more economic.—N. A.

学園ウイークリーに掲載されたDr. Suenaga が寄稿したHYGIENE OF THE EYE 「目の健康法」

末永敏事の元妻 中島静江さん関連記事



「ちやんなが出で、散歩にこの東に大へんすすめ
すなはて、他のスカートに非毛皮洋服など、アーチ
椅子も、チラシも、おもむろにうらめます。
娘のスカートは、黒や白を多くする事が多い
事で、大きめの花柄や、地の模様のスカートがアーチ
椅子の特徴です。娘の服のアーチ椅子も、それ
ほどの特徴をもつて、娘の黒いスカートを似せてあります。

1936年(昭和11年)5月号

婦人之友社提供



上の寫眞はパリーの
佐藤夏子さん（向つて
左）と中島静江さん。
下二枚の寫眞は、ク
リーランドの松岡洋
子さんとその學校のス
タディアム。

松岡洋子さんは日本
をたつてから、はや一
年八ヶ月、日枝丸の船側によつて、泣き顔をして別れの手を振つてゐたあの子供らし
い洋子さん、こんなに娘らしく成長しました。洋子さんがおちらで、どんなに健氣
な勉強をしてゐるか、本誌にのせた底々の手紙で皆様は御存じだと思います。

佐藤夏子さんはパリーに住んで一年以上、昨年十一月には赤ちゃんが生れ、今はま
た中島静江さんも加つて、一層樂しい聯やかな生活が送られてゐるやうです。

アメリカとフランスとそして日本と、實は海や山や陸に遠くへだてられてゐるので
すけれど、これらの寫眞をみてゐると、何だかパリーの並木道は丸の内の一期のやう
にも思へるし、宏壯なスタディアムも神宮外苑あたりに建てられてゐるやうな氣がす
るではありませんか。

バリーの佐藤さん洋子さんの手紙を本文につきました。



旅立つ人



さい。

んさ子姫佐 ふさ江静島中、てに里巴

ムアイデタスのルークスイハ・ツイハーカーエン

クリーランドにて、松岡洋子

に向かって右側が中島静江さん



1922年竣工した頃の自由学園明日館、静江の職場であり、1927年（昭和2年）には夫だった敏事も教員として在籍していた。



道伯の筆と思われる書が描かれた薬箱

右側の柳行李は敏事の遺品



「薬研」 手で輪を転がし、薬草を粉碎する



薬箱

この箱の中には敏事より
井村家ご子息壽彦氏へ
贈られた医学書及び
書籍等が収められて
いた。



寺子屋を主宰していた道伯筆による書の手本（春夏秋冬4枚の内、春）



敏事の遺品 木製の行李



"NIPPON YUSEN KAISYA"のラベル

左の行李側面に貼られていたもの。

ラベル中央の社旗「白地に2本の赤帯」、これは
現在、日本最大級の海運会社「日本郵船」と同じ。
当時、井村家において海外渡航者ではなく、
従って、敏事が台湾赴任時や米国留学時に
使用したものと思われる。

残念ながら船名、Berth No. CABIN No. が空欄で
あり、年代の特定には至っていません。

終わりに

末永敏事平和記念館 開館5周年記念として作成いたしました。

これ等の資料は長崎新聞社・森永玲氏が『反戦主義者なる事通告申し上げます』を執筆されるにあたり集められた
資料をご提供いただいたものです。又、遺品等につきましては当記念館理事・井村泰成氏よりご提供頂きました。
本紙へ未掲載の資料・遺品等も多くございます。是非一度ご来館下さい。



末永敏事医院跡、末永道伯屋敷跡、井村兼治氏生家、井村荒喜氏（不二越創業者）生家
及び末永敏事平和記念館（小笠 柴家 敷地内）周辺図

道伯屋敷跡地は北有馬郵便局裏側、石垣に囲まれた広大な敷地

道伯屋敷のすぐ隣に敏事の親友井村兼治氏の生家があった。

また、そのすぐ近くに敏事医院跡（森永 玲著『反戦主義者なる事通告申し上げます』参照）

石垣に囲まれた広大な屋敷であるが、現在は所有者が代わっているため、見学時は注意を要する。

末永敏事平和記念館は県道30号と県道217号の交差点信号を217号へ入り約100メートル
右側の小笠家の敷地内。

通常、当記念館は人員の都合上施錠していますが下記の電話にご連絡頂ければ開錠いたします。

連絡先 090-4982-0279 (森永)

年号	年齢	事 項
1887年 明治20年		末永敏事 南高来郡北有馬村今福に生まれる 父 末永道伯 母チヨ
1906年 明治39年	19	青山学院中等部卒業 (プロテスタント系新興校)
同 同年		内村鑑三に惹かれキリスト教徒になる
1912年 大正元年	25	長崎医学専門学校卒業 (現 長崎大学医学部)
1914年 大正3年	27	台湾総督府 台北医院勤務
1915年 大正4年	28	アメリカ シカゴ大学・シンシナティ大学に留学
1924年 大正13年	37	米国排日移民法案成立
1925年 大正14年	38	アメリカから帰国
同 同年		治安維持法公布
1926年 大正15年	39	内村鑑三の紹介で中島静江と結婚する
1927年 昭和2年	40	京都大学にて医学博士号を取得
同 同年		内村裕之の帰国祝賀会に敏事・静江夫妻出席
1929年 昭和4年	42	長崎県南高来郡北有馬村今福に医院を開業
1930年 昭和5年	43	内村鑑三死去 (69才)
1931年 昭和6年	44	満州事変勃発
1933年 昭和8年	46	末永敏事・静江離婚 これからの敏事の行動は途絶え
1937年 昭和12年	50	栃木県 (東武日光駅前) で末永医院を開業
同 同年		茨城県久慈郡賀美村折橋で末永医院を開業 
同 同年		日中戦争 (1937~1945)
1938年 昭和13年		茨城県鹿島郡 白十字會保養農園に結核医として入職
同 同年		国家総動員法施行
同 同年		医療関係者職業能力申告令発布
同 同年		茨城県知事宛「反戦主義者なる事通告申し上げます」を発し、逮捕される
1941年 昭和16~17年		東京・今井館 (内村) に現れる (54~55才)
1943年 昭和18年	56	親友・井村兼治氏と東京新宿・井村歯科医院にて再開 (述懐参照)
1945年 昭和20年	58	太平洋戦争終結
同 同年		末永敏事死亡 墓所 (今福・権現山墓地 (推定) 遺骨所在不明)
2019年 令和元年		特定非営利活動法人末永敏事平和記念館 設立 初代理事長 末永次利

茨城県にて発見された開業
当時の内科診療 医師
末永敏事 医院看板
劣化防止の為に別途保管し





1912年、長崎医専の大正元年卒業アルバムに掲載された長崎医専の全景

右上人物は田代校長

特定非営利活動法人末永敏事平和記念館

理事長 山本昌吾

〒859-2304

長崎県南島原市北有馬町丁287-1

TEL 090-4982-0279

mail kk9ec2fuuc8hs7uwc49q@docomo.ne.jp



NPO法人末永敏事平和記念館全景

令和 5年 5月 1日 発行